

ユタノのふしぎな夏

徳之島町立亀徳小学校 三年 なかお 中尾 まりの 茉莉乃

「ハーレイ、朝花はやりぶし。」

ユタノは三味線大好きな小学三年生の女の子。毎朝、亀徳海岸に三味線を持っていき島唄の練習をしています。ユタノが歌うと、友だちのイソヒヨドリのイソちゃんがピーツツピーピーと鳴いておはやしを入れています。「イソちゃん、ありがとう。今日はいい感じで声が出ていたでしょう。どうかな。」

すると、アカシヨウビンのアカ先生が、

「トウルルルー。いいぞ。次はもっとえ顔で。」

と、ユタノの頭の上を回っています。

「よかった。アカ先生にほめられた。ようし、次はもつとにこにこ顔で歌おう。」

上手に歌えば歌うほどアカ先生は、長く鳴いて頭の上をとんでほめてくれるので、ユタノはアカ先生の鳴き声をいつも待っています。

「うまくいったから、次の唄の練習をしよう。」

ユタノはよいすらぶしを歌い出しました。すると、そこに白い鳥があらわれました。

「わたしは、うなり神。ユタノ、見せたいものがあるからこちらへおいで。」

ユタノは、急に話しかけられびっくりしましたが、イソちゃんとアカ先生といっしょに白い鳥の後をついて走り出しました。がけの上のかいだんが見えてきました。そこを一気にかけあがると、「あれっ。空につながっている。どこに行くの。」と思う間にすいこまれました。

目をあけると、そこは亀徳川の近くでした。でも、木でできたはし。わらぶきの家。図書館で見た昔の亀徳の写真のようです。

「ここは、昔の徳之島じゃ。どうやらちがう世界にまよいこんだようだぞ。」

さすがのアカ先生もおどろいているようです。

「どうしよう。大へんなことになった。」

と、イソちゃんがなきそうな声で言いました。ユタノは、「タイムスリップしたの。すごい昔の人とも友だちになりたいな。」と思い、

「だれかに話を聞いてみよう。」

と言って歩き出しました。どこからか楽しそうな声が聞こえてきました。歌声の方を見ると、たくさんの人が田んぼで何かをしています。うなり神が教えてくれました。「この唄は、いにすりぶし。しゅうかくしたお米をせい米するときに歌った唄だよ。」

三人は、いっしょにやることにしました。

「仕事は大へんだけど、みんなで仲よく声を合わせて歌うと、楽しくなるもんだよ。」

と村人たちがにつこりしながら教えてくれました。三人はいつの間にか大へんなこともわすれて、きれいな歌声をひびかせながらせい米しました。せい米がひとだん落したところで、ユタノが言いました。

「みなさん、わたしの唄を聞いてください。」

ユタノは、楽しくすごせたお札に歌うことにしました。村人たちは、さいしょはしずかに聞いていましたが、ユタノの三味線のばんそうに合わせて自分たちで唄を作って歌い出しました。その唄に合わせて手びょうしをしたり、かけ声を入れたりしています。

「あら、どっこいどっこい。」

「ピーツツピーピー、トゥルルル。」

それに合わせてイソちゃんもアカ先生もいっしょに合いの手を入れています。いつの間にかぶたみそやパイヤづけ、やぎじるなどがならび、おいしそうに食べている人もいます。

ユタノはワイドぶしをひき始めました。

「ワイドぶしだ。ワイド、全島一、ワイド。」

村人たちは立ち上がり、イソちゃんもアカ先生もみんな手も足もぐちやぐちに動かしてとびはねました。わら

っている人もいます。ないている人もいます。でも、何だかみんなが一つになっています。おわりたくなってユタノもめいっばい大きな声で歌いつづけました。みんなのわらい声がいつまでもどこまでも村中にひびきわたり、まっ暗になるまでつづきました。

「今日は本当に楽しかったね。また会おうね。」

幸せな気分ですユタノが言うと、村人たちが大切な人とのわかれを歌った行きゆんにやかなを歌い出しました。ユタノは目をとじながら今日のことを思い返しました。

「島唄は昔から人々のくらしの中で、つらい仕事をささえたり、気持ちや大切なことを伝えたりする手紙みたいなものだったんだな。」と思いました。

「唄は半学という言葉がある。島唄を歌うことは人生の半分を学んだに等しいという意味だ。これからもっといろんな島唄のことを学んで、みんなにとどけておくれ。」

うなり神がそう言うと、急に目の前がくると回り出し、気づくとユタノは、亀徳海岸で三味線をだいてねていました。

今日はおまつり。ユタノは島唄を歌います。うなり神や村人たちのことを思い出し、その思いを歌声にのせて。空には、イソちゃんとアカ先生が見守っています。

「ハレーイ、かふなくとう、あらちたばれ。」

白い鳥も近くにいたような気がしました。
「ユタノ、これからもたのんだぞ。」